

付 編

東海地方の山茶碗生産について

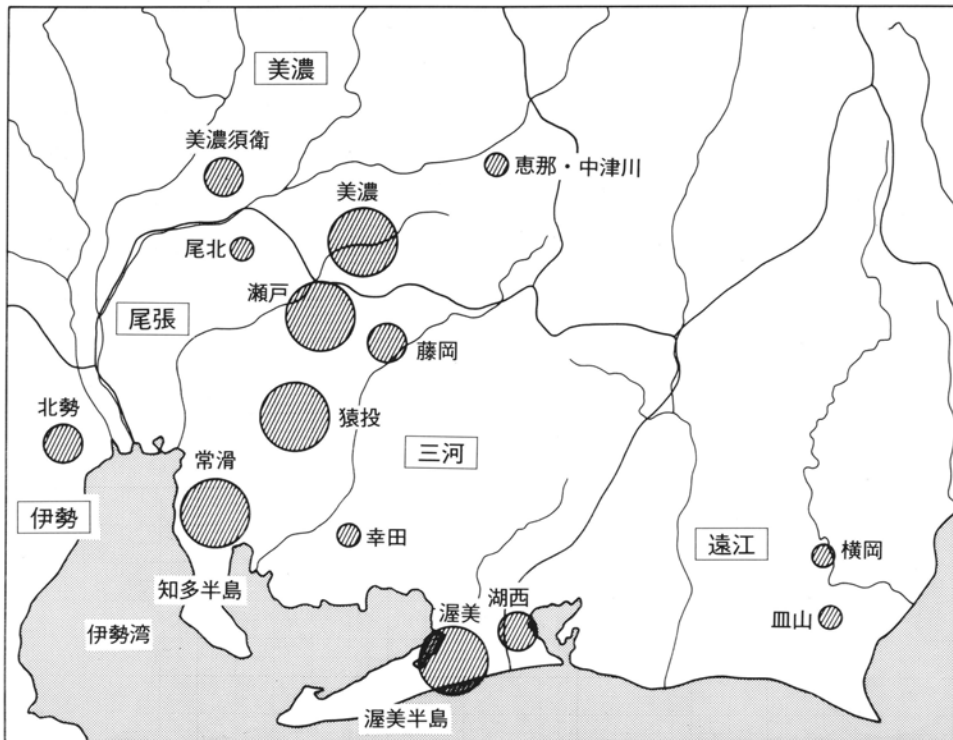
付編 東海地方の山茶碗生産について

1. はじめに

山茶碗の生産地は愛知県・岐阜県を中心にして、各地で展開しており、静岡県・三重県にも見られる。窯の数は全体で数千基を超える東海地方独自の巨大な窯業生産体系である。その製品は東海地方を中心に広く分布し、この地方の中世集落遺跡から出土する遺物のほとんどを占める状況である。割合でみると約90%近くになる¹⁾。従って、山茶碗は集落遺跡の時期を決定するのに大きな役割を果たしている。窯跡の調査も各生産地で行われており、編年も組み立てられている。また、遠くは平安京や鎌倉などの都市遺跡でも出土例が報告されている。同じ窯業生産品でも「瀬戸」や「常滑」のように、あまり遠くまで流通するものではないが、西日本の瓦器、土師器、関東の須恵系土師質土器などに相当する東海地方においては中世の代表的な日常生活器となっている。

山茶碗は古代の灰釉陶器生産の系譜を引くもので、瓷器系陶器第2類に分類される無釉の陶器である²⁾。山茶碗は一般的には砂粒を多く含むいわゆる“東海地方南部系”山茶碗と均質で精良な胎土を持つ“東海地方北部系”山茶碗の2つに大きく分類される。後者は美濃国と瀬戸窯の北部にのみ見られるもので、それ以外の産地はすべて前者に含まれる。この大きな2つの範ちゅうの中での生産地の違いは、細片になるとほとんど区別がつかないのが現状である。生産地を同定することは単に流通問題を考える手がかりになるのみならず、生産体制や商品経済などとも関連する問題となってくる。本報告では各生産地の山茶碗の胎土を分析することにより、生産地ごとの特徴を抽出し、その区別を図ろうとするものである。

各資料は、生産地ごとに記号、番号を付し、全体で通番をふった。科学的分析方法としては胎土の



第65図 東海地方各地の山茶碗生産地

蛍光X線分析、顕微鏡の表面観察による岩石学的分析を行い、興味深い結果を得た。その結果についてはそれぞれの報告に譲るが、付編では分析の基礎となった資料について紹介し、併せて各地の山茶碗の特徴と生産地の動向について述べてみることにする。従って第Ⅳ章科学分析の項で用いられた資料はすべて共通で、この項で説明する資料Noとも一致している。

2. 資料について

まず、初めに各生産地の状況について述べ、資料の紹介をする。なお、一つ一つのデータは第28～31表に記した。

1) 美濃国

美濃国は「延喜式」に6か国の須恵器調貢国の一つとして登場する。古代では須恵器生産が非常に盛んであった地域である。濃尾平野の北端には大生産地である美濃須衛古窯跡群が存在する。美濃須衛古窯跡群は8世紀代にピークをむかえ、それ以降急激に衰退していった。一方、美濃東南部には美濃古窯跡群が存在するが、7世紀代より単発的に須恵器生産が行われていた。10世紀になると灰釉陶器生産が開始され、11世紀代には猿投窯に替わる灰釉陶器の一大生産地となった。中世になると山茶碗生産に転換し、もともと耐火度が高い良質の粘土が厚く堆積している地域であるため、均質な胎土の製品を量産した。特に14世紀以降は衰退する瀬戸窯と交替して、生産の中心地となった。また中世に東山道沿いに発達した生産地である恵那・中津川窯もある。

a. 美濃古窯跡群（以下、美濃窯、記号MN 第66図－1～18）

美濃窯は岐阜県の東南部、多治見市・土岐市を中心とした地域に立地する窯跡群で、戦国期以降、志野・織部といった茶陶の産地として名高い所である。それ以前においては10世紀代に猿投窯から技術導入がなされ、灰釉陶器生産が開始された。中世になると良質の胎土を生かした緻密な胎土の山茶碗生産が行われた。14世紀には尾張・美濃の中世集落における美濃産山茶碗の出土量も飛躍的に増加する。窯の数は数百基を数えるものと思われる。灰釉陶器・山茶碗の研究は調査も進んでおり、体系的な編年も組み立てられ、その変遷についてはかなり明らかにされてきている³⁾。碗の形態は12世紀段階では他の瀬戸窯などの南部系諸窯と違い、やや深めで径高指数が大きいことが違いとして指摘される。時代が降るにしたがって皿などは器高が減じていく。14世紀以降は碗・皿ともに特にこの傾向が顕著となる。15世紀以降は碗の器高が極端に低くなり、皿に近い器形となる。また、碗・皿とも体部が全体的に薄く、胎土が均質で精良であることが極めて特徴的である。

美濃窯のものは一見して識別が可能である。基本的に胎土にはほとんど砂粒や小礫を含まず、極めて均質な胎土である。色調は若干灰色を帯びた白色である。12世紀～13世紀のものは比較的体部に厚みがあるが、14世紀代のものは器壁がかなり薄く、堅緻なものとなる。碗・皿とも同じ胎土である。

1は灰釉陶器最末期の西坂1号窯式（11世紀末～12世紀初頭）に位置づけられるものである。9、11、12は標式窯となっている丸石3号窯（12世紀末～13世紀初頭）の遺物である。10、11は13世紀中葉の窯洞1号窯のものである。体部にはまだ厚みが残る。5は標式窯である明和1号窯（14世紀前葉）のもので、この頃より美濃では器壁が薄く胎土の精良な山茶碗を量産するようになるのである。15世紀以降は、7や8のように碗といっても皿に近い偏平な形態の器形になってしまう。

b. 美濃須衛古窯跡群（以下、美濃須衛窯、記号MS 第66図-19～28）

中世における美濃須衛窯はいままで不明な点が多く、13世紀代の四耳壺の存在が知られるのみであった。生産の開始は灰釉陶器に遡る。系譜としては尾北窯の系譜を引くものであると考えられている。時期的には13世紀末まで続くものと思われる。調査例はなかったが、近年、御坊山南遺跡で数基の山茶碗窯が初めて調査され、具体的な生産についても知られるようになってきた。器種は甕や壺、鉢などがあり比較的豊富である。詳細は報告書の刊行を待たなければならないが、胎土は砂粒の多く含み、形態的にも径高指数が小さく、北部系というよりも南部系のそれに近い。ただ、碗の高台の形や小碗の形は独特の形態を採る。

美濃須衛窯は美濃の東部地域と違い、胎土から見ると南部系の胎土によく似ていて、径約 0.5mm位の白色の砂粒を含む。色調は灰白色であるが、灰色のものもある。調査例が少ないが、特徴的な形態をとる。

20の碗は体部の胎土が濃い灰色で、高台は薄い灰色であるという特色を持ったものである。また、23や24のように高台がついていないものも見られる。その他の種としては小碗や片口碗、鉢・壺・甕といったものがみられる。

c. 恵那・中津川古窯跡群（以下、恵那・中津川窯、記号EN 第66図-29～31）

恵那・中津川窯は岐阜県東部の恵那市、中津川市を中心に分布する窯跡群である。その製品は鉢を中心に東山道沿いの信濃や関東にももたらされている。調査例が少なく、その変遷等は明らかでない。基本的には北部系であるが、南部系の特徴を持つ点もある。

恵那・中津川窯の胎土は砂粒をほとんど含まず比較的均質で体部も薄い。色調はやや灰色がかった白色である。

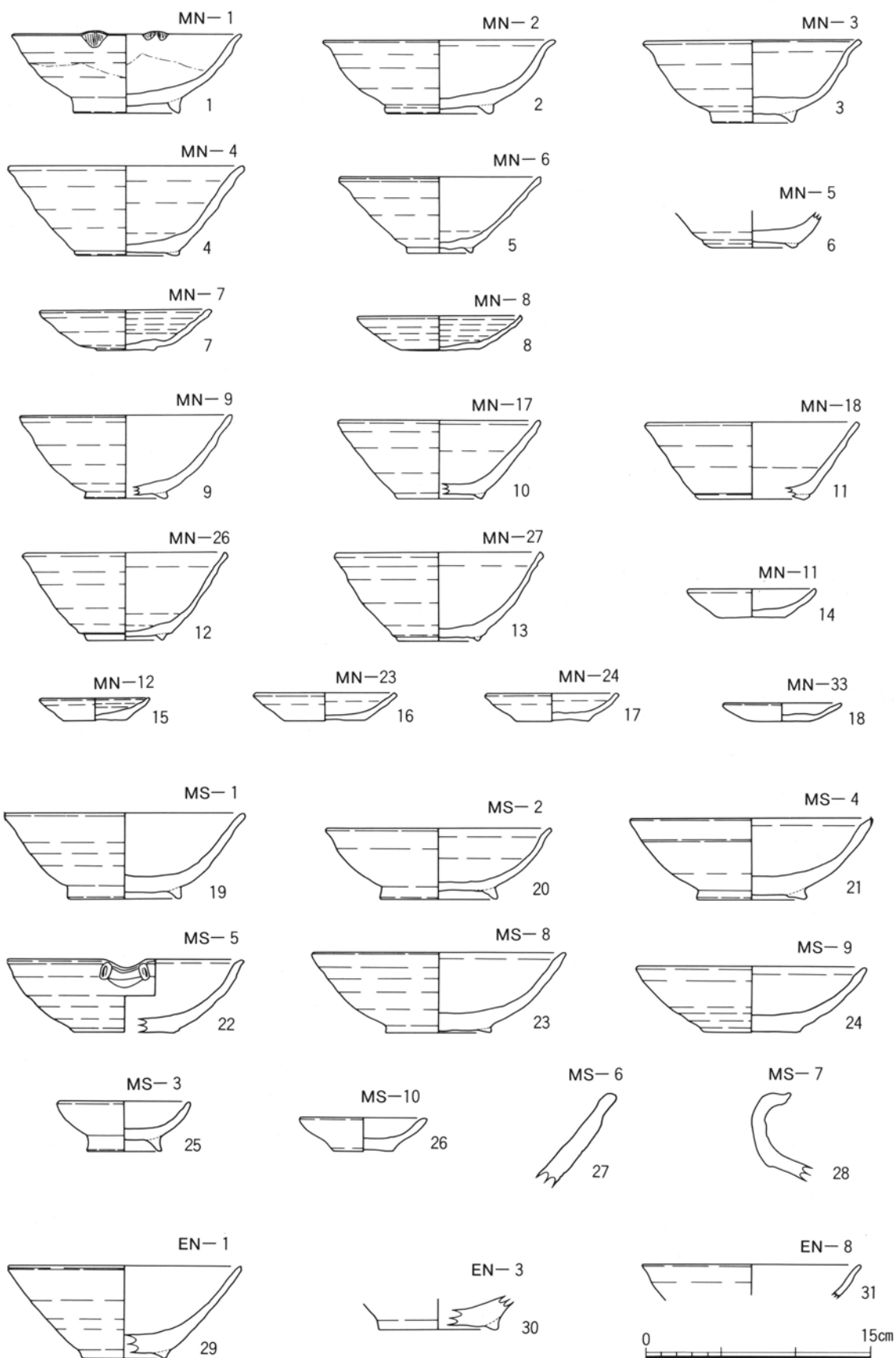
29～31は永田5号窯から出土したものである。永田5号窯では窯体の他に工房跡やロクロピットが検出されている。29は焼成不良であるが、窯内から一括して出土した生焼けの一群の中の一つである。時期的には12世紀末であると考えられる。

2) 尾張国

尾張国では名古屋市東部の丘陵地帯に古代における須恵器・灰釉陶器生産の中心地であった猿投山西南麓古窯跡群が立地する。猿投窯は11世紀代になり、灰釉陶器生産が衰え、12世紀には施釉技法を捨て、山茶碗生産に転換する。その後も生産は連続してゆくが、14世紀以降は完全に衰退してしまう。また、もう一つの大きな須恵器・灰釉陶器生産地であった尾北古窯跡群では中世になると完全に衰退し、12世紀後半以降、中世を通じて生産は全く行われていない。これら古代の須恵器・灰釉陶器生産の中心地の様相とは対称的に、新しく興った瀬戸市を中心とした瀬戸古窯跡群は古代末期に灰釉陶器生産を始め、中世になって急激に生産を拡大し、巨大な生産地となった。しかも当時、国内で唯一の施釉陶器生産も生み出した。また、尾張南部の知多半島には常滑古窯跡群が存在する。常滑古窯群では山茶碗の他に大甕や壺等も生産し、壺や甕は全国的に流通した。13世紀以降山茶碗生産は衰退し、甕等の大型品の生産に力が入られることになる。

d. 瀬戸古窯跡群（以下、瀬戸窯、記号ST 第68図-32～45）

小田妻古窯跡群が含まれる瀬戸窯は猿投窯の東山地区と接し、工人も猿投窯から瀬戸へ移って来た



第66図 美濃国各地の分析資料実測図 (1 : 4)

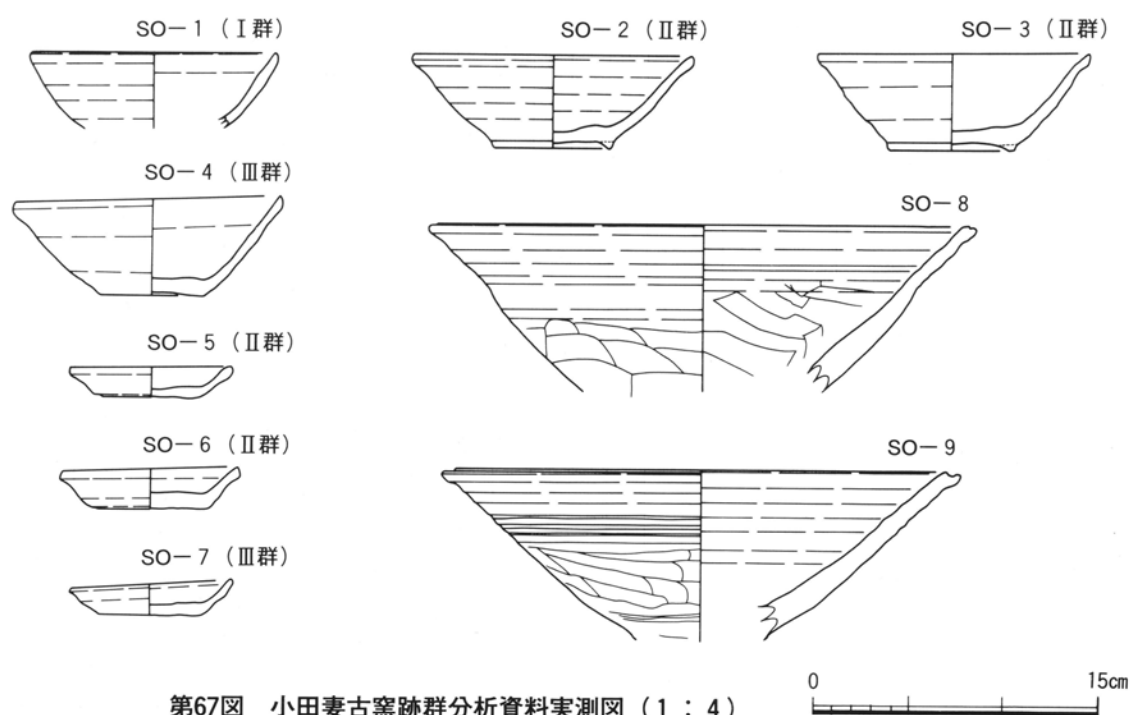
と考えられている。中世瀬戸窯は窯数約600基以上といわれるが、調査された窯の数も多く、編年も細緻⁴⁾なものが作られている。12世紀代は胎土に若干の砂粒分を含み、口径が大きく径高指数の小さい形態が一般的であった。ところが12世紀末にはこの南部系のものが作られなくなり、すべて北部系の均質な胎土を持つものに変化するとされる。13世紀になると再び胎土に砂粒分を極めてたくさん含む胎土のものを生産するようになる。この時期が量産期で生産が増大するが、14世紀後半以降は衰退してゆく。

瀬戸窯の山茶碗には2つの系統があり、違った様相を呈する。一つは南部系と呼ばれる系統である。砂粒を多く含み、長石分の吹き出しの多いものである。12世紀代のものはまだ比較的均質なものであるが、13世紀中葉以降のものは混和材が多く使われていると考えられ、荒い胎土となっている。色調は白色を呈し、鉄分や長石分の吹き出しもよくみられる。もう一つの系譜は北部を中心に分布するもので、美濃窯と同じ均質な胎土を持つものである。このような胎土を持つものは瀬戸のものと美濃のものとの区別するのが難しい。

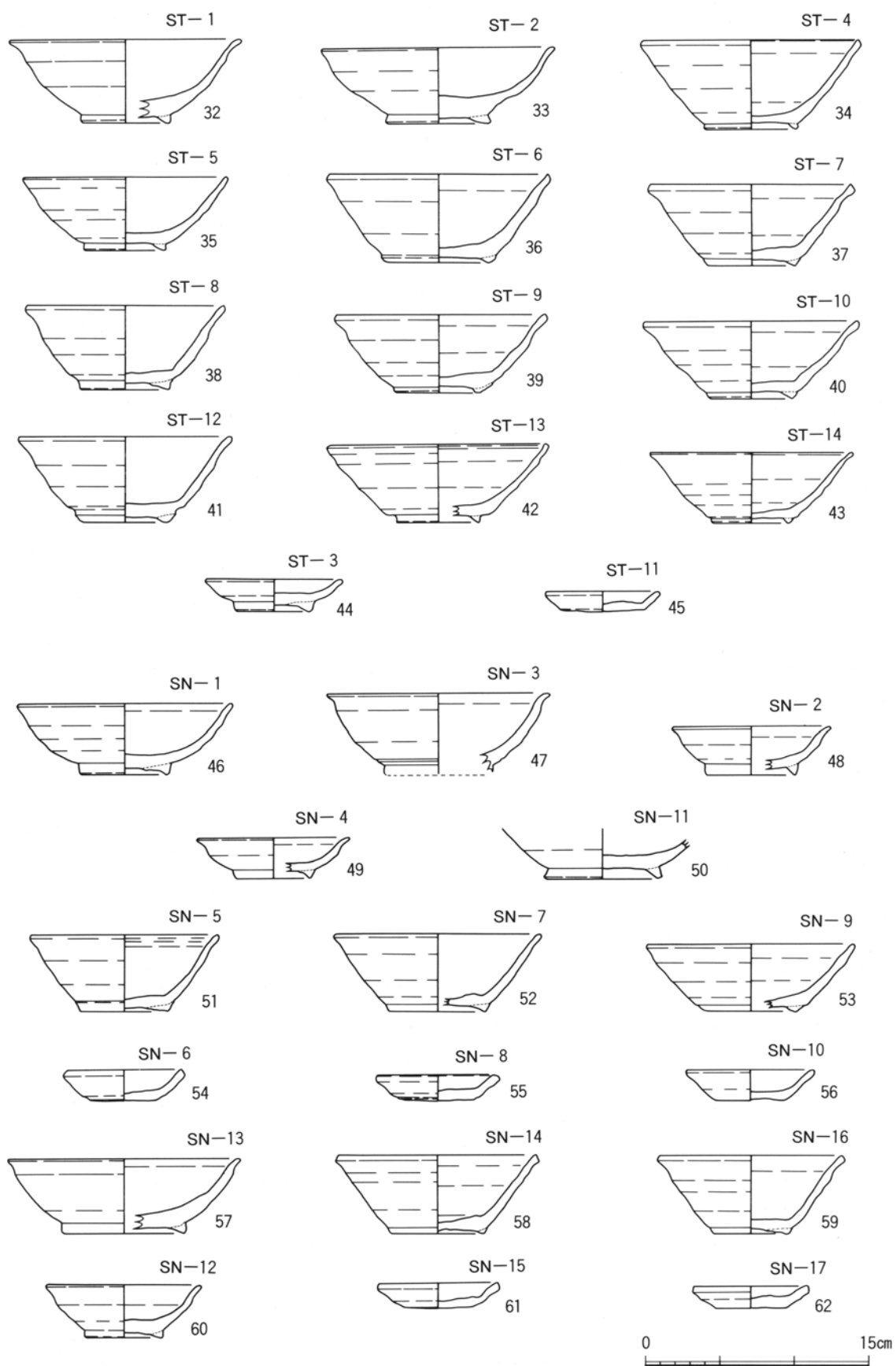
32、33は12世紀代のもので体部が丸みを持っているのが特徴である。37～41は13世紀代で胎土に砂粒を多く含むいわゆる典型的な“荒肌手”の胎土を持つものである。42、43は北部系のもので、体部がかなり薄く、14世紀に降るものと思われる。

小田妻古窯跡群の資料（記号 SO 第67図）について簡単に触れておく。前述のとおり、小田妻古窯跡群では碗・皿に3種類の胎土があることがわかっている。鉢は別の胎土を使っていると考えられるので、これを加えると4種類となる。SO-1は均質なⅠ群の胎土を持つ碗である。SO-2・3～5・6はⅡ群の胎土を持つものである。SO-4、7はⅢ群の胎土を持つものである。基本的には碗・皿は同じ胎土を用いている。これに対して鉢（SO-8、9）は違う胎土を用いている。

e. 猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯、記号SN 第68図-46～62）



第67図 小田妻古窯跡群分析資料実測図（1：4）



第68図 尾張国各地の分析資料実測図 (1 : 4)

猿投窯には 500基以上の山茶碗窯が存在していると考えられている。大きく東山・岩崎・折戸・鳴海（鳴海支群）・鳴海（有松支群）・黒笹・井ヶ谷の7つの地区に分かれるが、かなり広い地域に分布していることから、南と北では様相が違う。東山地区や岩崎地区では瀬戸と接していることから、見掛けの胎土、形態などが瀬戸と類似している。他方、鳴海（有松支群）や井ヶ谷地区など南のものは常滑窯の北部と接しており、胎土なども区別するのが難しい。編年研究も行われ、その変遷はかなり明らかにされている⁵⁾。形態的には各時期を通じて瀬戸窯のものとよく似ており、対応関係も検討されている。13世紀以降になると口径に対して器高の高いものが増えてくる。

猿投窯の山茶碗は基本的には砂粒の多い、灰白色の胎土を持つものである。12世紀代のものは砂粒も比較的均質であるが、13世紀代以降はかなり粗な胎土となる。また、猿投窯は広い地域にわたって分布するため、南北でかなりの差がある。北部は瀬戸市に接していることもあり、形態や胎土が瀬戸の製品とあまり区別が付きにくい。南部は常滑と接しており、常滑窯のものと区別するのが難しい。

46～49は12世紀前半代のもので東山地区のものである。51、52は鳴海（鳴海支群）地区のもので13世紀前半から中葉のものである。53、56は鳴海（有松支群）地区のもので、常滑窯のものとよく似た胎土である。50は折戸地区、57～62は黒笹地区のものである。

f. 尾北古窯跡群（以下、尾北窯、記号BH 第69図－63～67）

尾北窯は古代において猿投窯と並んで尾張の須恵器・灰釉陶器生産の中心地のひとつであった。古代末期には生産もほとんど終息してしまう。胎土・形態は猿投窯とよく似ておりほとんど区別することができない。

尾北窯の製品は猿投窯とあまりかわらない。胎土に若干の白色の砂粒を含むものが多い。

資料は篠岡80号窯のものである。篠岡80号窯は12世紀前半ころと考えられ、灰釉陶器の最末期か山茶碗の初期か判別は難しい時期のものである。しかし、この地域のほぼ最終の窯であると考えられる。

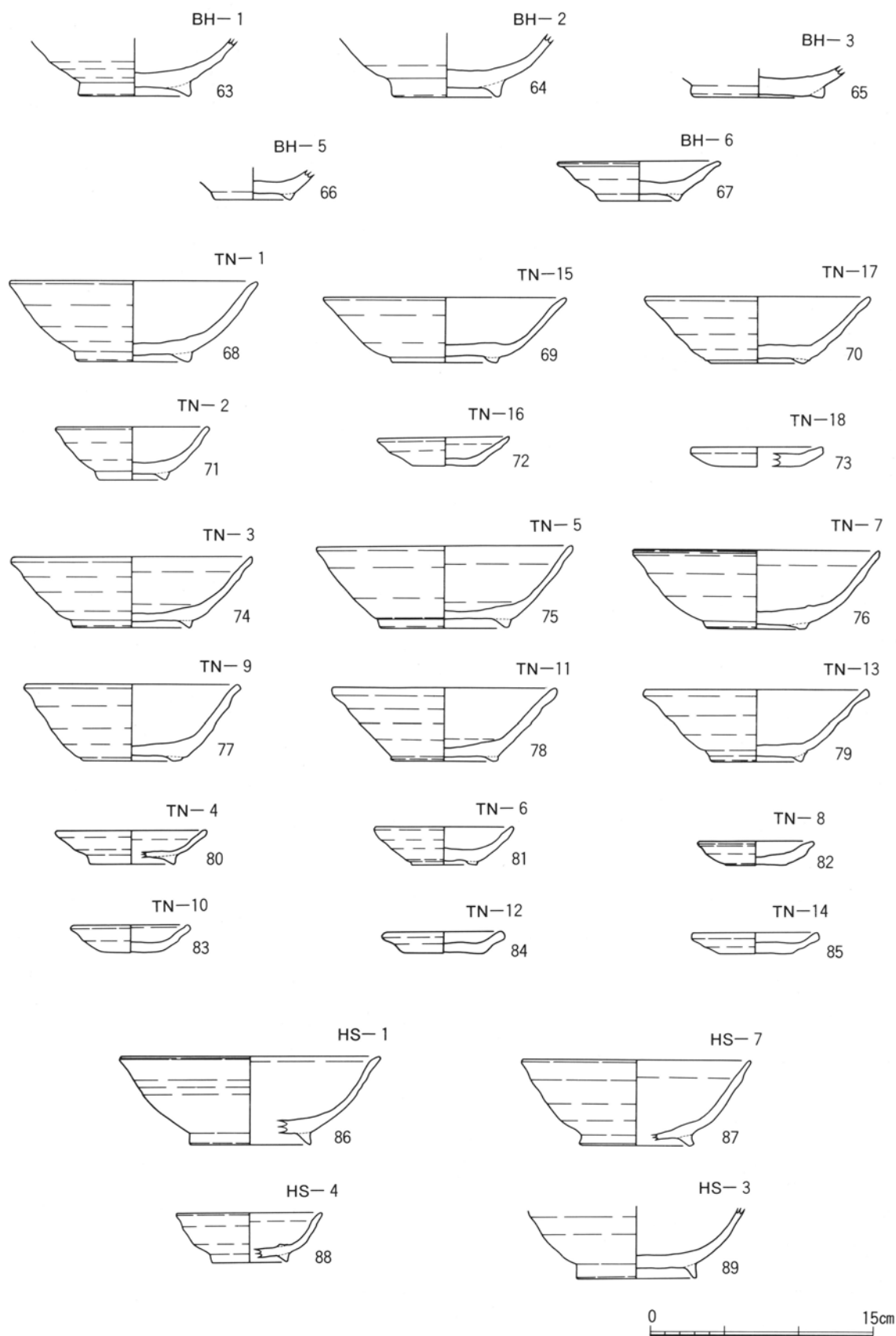
63、64などは三角形の高台である。

g. 常滑古窯跡群（知多古窯跡群ともいう。以下、常滑窯、記号TN 第69図－68～85）

常滑窯は常滑市を中心に知多半島のほぼ全域に窯跡が分布し、その数は 2,000基を越えるといわれている。南北にかなり広く分布するが、形態的には北部も南部も大きく変化はない。生産の開始は古代末期に猿投窯の影響下に灰釉陶器生産が始まり、その後山茶碗生産に転換していく。生産の初期は山茶碗の生産も盛んであったが、13世紀代になると大甕などの壺・甕類の生産が盛んとなり、東日本の太平洋側を中心に汎日本的に製品が流通する。その反面、山茶碗生産は衰退に向かい、14世紀になるとほとんど山茶碗生産を行わなくなる。研究の歴史は長い⁶⁾が、従来は主として壺・甕類が中心であった。しかし、近年山茶碗の研究も進んできた。

常滑窯は形態的には、高台が丸みを持ち、高台径が大きく、胎土は一般的にかなり大きくて不揃いの砂粒を含むことが多い。また、小指大の小礫が入っていることがよくある。色調は淡灰色から暗灰色のものが多い。

68～73は常滑窯でも北部のもので、知多半島基部の東海市の資料である。74～76は中心地である常滑市周辺のもので、体部に丸みを持っており、12世紀代のものと考えられる。77や78は知多半島中南部の資料である。



第69図 尾張・伊勢国各地の分析資料実測図 (1 : 4)

3) 三河国

三河国では古代に於て各地で須恵器・灰釉陶器生産が行われていたが、中世になるといくつかの拠点的な地域で生産が活発化する。藤岡古窯跡群は三河国にはいるが、瀬戸とは山を隔てた反対斜面に当たり形態的にも関連性が深い。今回は三河国に含めたが、瀬戸窯の一支群と考えた方がよいかも知れない。幸田古窯跡群では古代末期に灰釉陶器生産が始まり、中世にはそれを受けた山茶碗生産が行われる。渥美古窯跡群は中世でも壺・甕の生産地として有名であるが、山茶碗生産も12世紀代から13世紀前半にかけてかなり行われていたものと考えられる。

h. 藤岡古窯跡群（以下、藤岡窯、記号FJ 第70図－94～100）

藤岡窯は西加茂郡藤岡町を中心に分布する約50基前後の生産地で、若干の施釉陶器窯も存在する。生産の中心は13世紀から14世紀にあると思われるが調査例も少なく、その様相は明らかでない⁷⁾。ただ、形態的には瀬戸窯に極めて近いことから、瀬戸窯と同じ様な変化をするものと思われる。

藤岡窯は瀬戸窯のある丘陵の反対斜面に位置していることから、形態的には瀬戸窯の製品とほとんど変わらない。灰白色の色調の長石分の吹き出しが顕著である。

資料は中清田窯のものであるが、胎土は粗く砂粒を多く含むもので、黒斑の吹き出しが多く見られる。94、95は碗に高台があり、13世紀代と考えられるが、それ以外は無高台のもので時期的には若干下がるものと思われる。

i. 幸田古窯跡群（以下、幸田窯、記号KD 第70図－90～93）

幸田窯は額田郡幸田町や岡崎市を中心に分布する窯跡群で末期の灰釉陶器窯、山茶碗窯約20基が確認されている。山茶碗窯の調査例はないが、採集資料などから若干の編年研究が行われている。大きくは南部系の範ちゅうで理解できるが、全体的に各時期を通じて体部が深く、高台が高い深碗的な形態である点が特徴として挙げられる。時期的には13世紀前半で終るものと思われている。

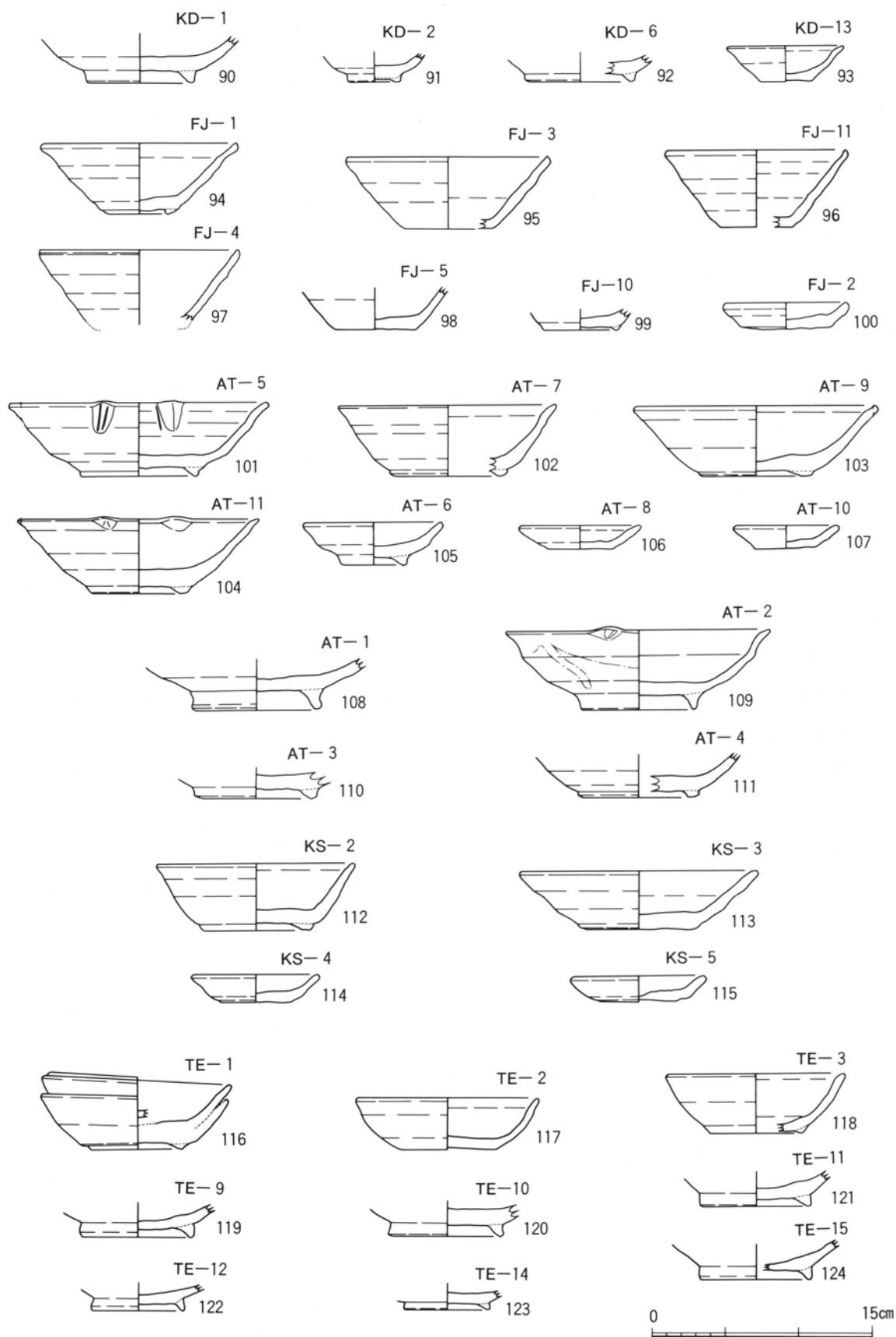
幸田窯では調査例が全くなく、その様相は不明であるが、胎土は砂粒分の多い淡灰色のものである。見かけは余り変わらないがⅣ章3節の蛍光X線の分析では唯一完全に他の窯跡と分離できる胎土であった。

90、91は皿に高台を持つ点などから12世紀前半、93は高台がない点などから12世紀後半と考えられる。

j. 渥美古窯跡群（以下、渥美窯、記号AT 第70図－101～111）

渥美半島ではその基部にあたる豊橋市二川周辺に灰釉陶器の窯が分布している。中世になると東と西に生産地がそれぞれ移り、東に渥美窯が、西に湖西窯が興隆する。渥美窯は渥美郡田原町を中心に豊橋市南部から渥美半島のほぼ全域に分布が西みられ、300基以上の窯跡の存在が推定されている。渥美窯の製品では壺・甕類が各地で出土し、また東大寺瓦の生産地としても知られている。大アラコ窯では12世紀第2四半世紀後半から第3四半世紀前半に活躍したと考えられる国司「藤原顕長」の銘が入った壺が焼かれていたことから、実年代の定点を得ている。しかし、山茶碗についてはあまり省みられることはなく、全体的な様相はつかめていない。12世紀代は生産も盛んであったが、13世紀以降衰えを見せる。

渥美窯の製品には粒径の丸く揃った白色の砂粒が多数含まれ、比較的識別がしやすい。色調は灰白



第70図 三河・遠江国各地の分析資料実測図 (1 : 4)

色のものから黒灰色のものまでバラエティーがある。形態では13世紀まで輪花技法や漬けがけによる施釉技法が残ることが特徴である。

101～107は豊橋市南部の資料である。輪花を施したものが比較的多い。108～111は中心地である渥美郡田原町の資料である。109は輪花碗であるが、口縁部に灰釉を施釉する。

4) 遠江国

遠江国は古代に於いては大量の須恵器生産を行い、おもに東日本全般に製品を搬出していた湖西古窯跡群が存在する。湖西古窯跡群は9世紀になると衰退し、灰釉陶器生産は行わなかった。灰釉陶器生産はさらに東の遠江東部から駿河西部で焼成されていた。中世になると再び湖西地方に窯が築かれ山茶碗生産が行われるようになった。遠江東部でも各地で山茶碗生産が行われたが、比較的短期間で終了してしまった。

k. 湖西古窯跡群（以下、湖西窯、記号KS 第70図— 112～115）

湖西古窯跡群では、古代の須恵器生産が終了してから、灰釉陶器生産を行った窯は確認されていない。中世になり、再び窯が現れるが、これはおそらく渥美窯の流れを汲むもので、編年も渥美と同じ変化を⁹⁾すると考えられている。窯は静岡県湖西市を中心に数十基あると思われる。胎土・形態などは基本的に渥美窯と同じものと考えられるが、若干体部の丸みが強い。

湖西窯の山茶碗の胎土は渥美窯とほとんど変わりはなく、かなり大きな粒径の砂粒を大量に含んでいる。

112～115は荒居窯のもので113は高台のない碗である。時期的には少し降ると思われる。

l. 東遠諸窯（記号TE 第70図— 116～124）

遠江東部から駿河西部にかけては古代末期の灰釉陶器窯や中世山茶碗窯が各地に点在している。それらは規模が大きくはなく、操業期間もあまり長くない。形態や胎土について大きな差異が感じられないことから、総称して東遠諸窯として取り扱うことにする。調査例が少なく不明な点が多いが、ここでは金谷町の横岡古窯跡群（以下、横岡窯）、菊川町皿山古窯跡群（以下、皿山窯）を中心に述べる。全体的には胎土が青灰色である点や形態的に体部が丸みを持つ点など他の山茶碗生産地のものとは若干違った様相¹⁰⁾を示す。

東遠諸窯はいくつかの窯跡からなっているが、それぞれ特徴がある。横岡窯のものは形態も特殊で胎土は暗灰色を呈する。これに対して皿山窯のものは灰白色の胎土を有する。

116～118は横岡窯キツネ沢支群のものである。117のように高台のないものも存在することから13世紀代に下がるものと思われる。119～124は皿山窯のものである。高台もしっかりしていることから11・12世紀代のものと考えられる。

5) 伊勢国

伊勢国では5世紀代より須恵器生産が行われ、灰釉陶器生産も北部の四日市市周辺で行われていた。それを受けて、山茶碗生産も若干行われていたものと思われる。伊勢は中世集落の調査も進んでいるが、出土する遺物はほとんど全てが山茶碗と“伊勢型鍋”と呼ばれる口縁端部を折り返す球胴型の土師器である。集落で出土する製品の産地については北伊勢が瀬戸、南伊勢が常滑、渥美等と考えられているが、在地生産についてはは¹¹⁾っきりしていない。

m. 北勢諸窯（記号HS 第69図－86～89）

北勢諸窯という窯跡群は存在しないが、今回分析を行った四日市市岡山古窯跡群の周辺では他にも山茶碗生産を行っていた可能性があり、それらを含めて仮に北勢諸窯という呼称で記述を行っていくこととする。

北勢諸窯では窯跡がほとんど見つかっていないが、岡山3号窯の製品は白色の砂粒を含む尾北の胎土とよくにている。

86～89は岡山3号窯のものである。施釉の痕跡は全く見られないが、高台はしっかりしており、灰釉陶器に入れるのか山茶碗に入れるのか難しい。胎土は砂粒分を比較的多く含む。

3. 各地の山茶碗生産の動向

以上、各生産地の状況と山茶碗の特徴について見てきた。

山茶碗生産地全体の動きを見てみると、12世紀末がその生産にとって最も大きな画期であった。11～12世紀は各地で灰釉陶器生産を引きずる形で山茶碗を生産していた。猿投窯、美濃窯を別にとすると各生産地とも灰釉陶器生産末期に猿投窯から技術導入を行い、灰釉陶器を生産するが、中世になり、山茶碗生産に移行していく。従って形態・胎土ともに類似している点が多い。しかし、12世紀末になると瀬戸では全く形態・胎土の違う山茶碗が生産されるようになり、施釉陶器碗・皿の生産も開始する。大きく見れば、この時期が山茶碗生産における最大の画期であり、これを境に前期と後期に分けることも可能であると思われる。窯の数から見ても12世紀代の生産の中心は渥美窯、猿投窯、常滑窯であったが、13世紀にはいと瀬戸窯が大きく進出して交代する。しかし、瀬戸窯も14世紀になると衰退し、美濃窯が生産を増加させる。各窯跡群の生産地の動向はかなりダイナミックであったといえる。

消費地の状況を見てみると、食膳具においてはコンスタントに山茶碗が一定量使用されている。特に、土田遺跡などの例では山茶碗の比率は全遺物量のほとんど90%を占めており、14世紀頃までは需要に変化はなかったものと思われる。このような消費遺跡から出土する山茶碗の産地を同定することについては、大まかな傾向は確認できるが、個々の細片になった場合、なかなか決定することは難しい。今回の分析に関しては肉眼による識別も試みた。しかし、焼成状況や個体差が意外に大きく、一部にものについては産地を識別することは難しかった。特に12世紀代のものはいづれも灰釉陶器生産が母胎となって生まれたものであり、その丸みを持った形態や胎土が比較的砂粒分の少ない点など、産地を識別するのは難しかった。13世紀以降になると混和材の多用など地域的な特色が明確になり、産地の特定は比較的容易となる。ただ、Ⅳ章3，4節で示されたように同じ生産地でも地区によって違う胎土を用いたり、同じ窯跡群でも時期によって明らかに違う胎土を用いることがあることにも留意しておかなければならない。

今回の報告では山茶碗の産地同定について全生産地のデータを提示した。しかし、個々の資料の数があまり多くないので詳細な結果を提示できなかった。全生産のデータを集めて一括して提示することを目的としたため、基礎的作業としては意義があったものと考えている。今後、さらに資料を追加して、より高い精度でデータを蓄積して行かなければならない。また、消費遺跡の分析を通じて山茶

碗の流通の問題などについて総合的に判断していかなければならないと考えている。

謝辞

本分析を行うに当たり下記の諸氏、諸機関から資料の提供並びに多大なご協力を得た。

記して深く感謝の意を表します。

足立順司、池本正明、井上喜久男、春日井恒、後藤建一、柴垣勇夫、立松彰、中島隆、中野晴久、西部良治、林順一、藤澤良祐、若尾正成、渡辺博人、愛知県陶磁資料館、岡崎市教育委員会、小牧市教育委員会、瀬戸市教育委員会、田原町教育委員会、東海市教育委員会、常滑市民俗資料館、豊橋市教育委員会、名古屋市見晴台考古資料館、三好町歴史民俗資料館、岐阜県恵那市教育委員会、各務原市教育委員会、多治見市教育委員会、美濃陶磁歴史館、静岡県湖西市教育委員会、三重県四日市市教育委員会（五十音順、敬称略）

（城ヶ谷和広）

註

- 1) 城ヶ谷和広 1991「土田遺跡における中世土器の様相」『土田遺跡Ⅱ』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 中世陶器の名称は基本的に檜崎彰一氏の分類による。(檜崎彰一 1977「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集 3 日本中世』)
- 3) 田口昭二 1983「美濃焼」『考古学ライブラリー17』 ニューサイエンス社など。
- 4) 藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』など。
- 5) 斎藤孝正 1988「中世猿投窯の研究—編年に関する一考察—」『名古屋大学文学部研究論集』史学34など。
- 6) 中野晴久 1984「知多古窯址群における山茶碗の研究—編年に関する試論—」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅰ』など。
- 7) 近年、中清田窯の報告書が刊行され、その様相が明らかにされている。(井上喜久男 1992『中清田古窯跡群発掘調査報告書』藤岡町教育委員会。
- 8) 内田智久 1987「幸田窯の山茶碗」『マージナル7』など。
- 9) 後藤建一 1987「渥美・湖西中世古窯址群」『マージナル7』など。
- 10) 足立順司により、資料紹介が行われている。(足立順司 1985「東海地方東部の中世土器・陶器」『中近世土器の基礎研究』)
- 11) 三重県埋蔵文化財センター 新田洋氏より御教示を得た。
- 12) 註1) 文献